

援助職のリカバリー

《3》

～「一人っ子」の呪い～

袴田 洋子

去年の夏、ちょうど女子サッカーがワールドカップで優勝した時、私はある認定試験のようなものに不合格になり、苦しい思いでいました。06年頃から取り組んでいたものだったので、そのショックはかなり大きいものでした。自分のことを不合格にした団体組織のことを恨み、この後、団体に残って修行を続けるか、どうしたいのか、自分の気持ちを観察してみました。

「認定」という評価を強く求める自分、その団体の「肩書き」を欲している自分、この分野において認められるべき存在だと主張したい自分、などなど、すべては「認められたい願望」「他者評価」に繋がっていると判断、それこそは私が手放したいと思っていることだと考え、数年に渡ってお世話になってきた団体から離れることを選択しました。

自分の「認められたい願望」とどう折り合いをつけられるのか、私の永

遠の課題かもなあと、オリンピック女子サッカー決勝戦を見ながら、去年の夏を思い出しました。

看護実習、始まる

なんとか入学できた看護大学でしたが、「アディクション」的に彼氏のアパートに入り浸って、2年に進級するのに必要な単位を取得できずに留年、1年生を2度やって、ようやく2年に進級できても「新型うつ」のごとく「不登校」となり、それでもぎりぎりなんとか単位を取得して3年に進級。そうして、看護学部3年のメインイベント、病棟実習が始まりました。

正直、病棟実習で覚えていることと言えば、とにかく疲れたとか、とにかくいい加減な気持ちだったとか、そんなことが真っ先に思い浮かぶほど、「看護」に対する真摯な気持ちを持っている看護学生、ではありませんでした。

実習は5人くらいのグループに分

かれ、消化器外科、脳神経外科、救命救急センター、精神科病棟、産婦人科、オペ室などなど、色々な「看護」を勉強しに、大学病院内の病棟に向かいました。

あまり(ほとんど)真剣に勉強していなかった私は、まるで、実習もオリンピックのごとく「参加することに意義がある」精神で乗り切ろうとしていたようでした。外科病棟の実習では、「オペ後の看護」を主に学ぶのですが、病棟主任から「袴田さん、オペ後は何を観察するのですか？」と聞かれて、即答で「全身状態です」と言った私は、「袴田～！『全身』とは、何と何と何のことだかわかって言っているの!？ まったくもう～！」と呆れ怒られ、半日マンツーマンで指導されたことは、鮮明に覚えています。

「子ども」は苦手

毎朝8時15分から始まる病棟実習は、寝坊しないで起きられるか、そこからして恐怖なのですが、実は、私がもっとも憂鬱に思っていたのは、保育園での実習でした。小児看護だったか、地域看護だったか覚えていないのですが、地域の保育園で数日間、子どもたちと一緒に過ごして「健常児を知ること」が実習の目的でした。昔から「子どもは苦手」と

思っていた私は、その保育園実習に強い不安を感じていました。

私が「子どもは苦手」と思っていた当時の理由は、こんなものでした。「私は一人っ子で、自分の下に妹や弟がいないので、子どもの扱い方がわからない、知らない」。

誰かの家に遊びに行ったり、あるいは旅先で泊まったペンションなどに「子ども」がいたりすると、どう彼らに接していいか分からずに、私はとても困惑しました。「子どもってかわいいね」「子どもが好き」という人の気持ちも、まったく分かりませんでした。もっと言えば、わがままで甘えるばかりの子どもが、どうしてかわいいと思えるのだろうと、そんな風にも思っていました。また、ずけずけモノを言う子どもが、怖くもありました。そんな自分が看護実習で保育園に行き、子どもたちと戯れて過ごさなければいけない。想像するだけでげんなりしてきました。

ワケのわからない涙

保育園での実習そのものは、「戸惑い続けた」以外はあまり覚えていませんが、それでも強く印象に残っている場面があります。実習は、ちょうど保育園の運動会の頃で、かけっこやリレーの練習を一緒にしました。

確か、運動会当日が実習の最終日で、多くの保護者がきている中、運動会最後の園児全員リレー。最終走者のゴール場面で、ゴールした先生チームの保母さんが、一緒にゴールした園児を抱きしめたのを見て、涙があふれてきました。一緒に実習に来ている仲間にバレないようにしましたが、どうしてこんなことで自分は泣くのだろうと、その時はまったくワケがわかりませんでした。これを書いている今も、じわじわと涙ぐんでしまうのですが(苦笑)、その理由が、今はなんとなく言語化できます。「園児であるその子が、その子の存在が、そのまま丸ごと愛されている、認められている」という場面に思えるから、のようです。そして、それを羨ましいと思うのでした。

親には、甘えません！

すでに述べましたが、私は一人っ子で育ちました。私の下には3人生まれましたようですが、死産、流産、早産ということで、私は一人っ子になりました。幼稚園の頃、入院した母親のベッドサイドに集まった親戚の人たちを見て、「赤ちゃんが生まれたのに、どうしておばちゃんたちは泣いているんだろう、喜ばないの？」と不思議に思ったことを覚えています。

ということで、私は「昭和42年生まれの一人っ子」なのですが、この時代の一人っ子はあまり多くありません。クラスの子のほとんどに「きょうだい」がいました。そして、私は、「一人っ子は、甘ったれで、泣き虫で、わがまま」と、母方の伯母からいつも言われていて、この「一人っ子」という事実には、かなり長いこと、支配されてきました。

幼心にも、「甘ったれで、泣き虫で、わがまま」は、褒め言葉じゃないのはわかります。子どもの私は、それを言われることが、とにかくすごく嫌だったので、「絶対に言われたくない」と強く思い、「よし、自分が一人っ子って思われないようにすればいいんだ」と思って、親に甘えることを封印しました。「親に甘えない」というのが、子ども時代の私の課題で、幼稚園に入った時には、親に抱っこしてもらうことはありませんでした。

「一人っ子って思われないようにすること」の具体的な取り組みとして、「親に甘えないこと」が私の行動指針となり、それは、「親に甘えないことで、自分はようやく認めてもらえることができる」という思いになっていたと思います。親に甘えないこと、しっかりものでいること、そうしないと自分は認めてもらえない。子どもの頃は、こ

のように言語化などしていませんが、数年前に、自分の成育歴を振り返った時、自分が「一人っ子」に囚われていたということを思い出しました。

母親も認められたかった？

一方、昭和 20 年生まれの母親は、自身の姉(私の伯母)から「女は、子どもを複数人生まない、一人前じゃない」と言われていたようでした。「一人っ子は甘ったれ泣き虫わがまま」を会う度に幼い私に言っていた伯母なので、自身の妹(私の母親)にそのような事も言ったであろうことは想像に難くありません。

この先は、私の想像に過ぎませんが、結果として一人っ子になってしまった私を、母親は「甘ったれで、泣き虫で、わがまま」にならないよう、「甘やかさないようにしよう」と普通以上に意識したかもしれません。「一人っ子」を「しっかり者」に育てることで、母は自身の姉から認められようと思ったのかもしれません。しかし、「甘やかす」ことと、子どもを健全に「甘えさせる」ことは同じではありません。そのあたりのことを、18 歳で結婚し、22 歳で私を生んで、初めての子を育てるにあたっては、母親も手探り状態だったのでしょうか。母親が、私のことを笑顔で褒めたり、気持ちを認

めたりすることはありませんでした。なにより、自分より 14 歳年上の、昭和 6 年生まれの短気で真面目過ぎて怖い大工職人の夫の機嫌を確認しながらの日々では、娘の私に笑顔を見せる余裕は無かった、ということもあるかもしれません。

母親(18)、父親(32)

自分の成育歴の振り返り作業をしている時、叔母(母親の妹)にインタビューをしに行きました。私の母親はいったいどういう人生を送って来たのか、どんな人なのか、叔母に尋ねると、「お前の母ちゃんは、お前の父ちゃんと結婚してから変わったんだよ。お前の母ちゃんは、どこか抜けてて、ぽーっとしてて、おっとりしてたんだよ、もともとは。お前の父ちゃん、怖いだらう？(前号ご参照下さいませ) だから、初めはお前のうちにみんな遊びに行ったりしたんだけどさ、だんだん行かなくなっちゃったんだよ」と言いました。聞いて、少し驚いたものの、私の中では、パズルのピースがひとつ、はまったような感覚がありました。

18 歳で、父親(私の祖父)のやっている工務店で働いていた 32 歳の大工職人と結婚した私の母親は、4 年後の 22 歳で私を生むまでの間、

どんな生活だったのか、ようやく私が生まれた後、3度も妊娠しながら子どもは育つことができず、どんなことを考えながら生活をしていたのか、叔母の話聞いた後、「母親」ではなく、一人の女性としての物語をあれこれ想像しました。

封印、したツケ

そんなわけで、甘やかさないようにしたであろう母親と、親に甘えることを封印した子どもの関係性の中で、私は、「子どもとコミュニケーションをする」ということをモデルとして学んでいなかった、と言えるかもしれません。自分の成育歴の振り返り作業をしている時、「甘えられなかった」という言葉を「私は、ほんとは、甘えたかったんだ」と言い変えた時、たくさん涙が出ました。

「親に甘えない」を自分に課して、しっかり者であることを評価してもらい認めってもらうことで、ようやく存在することが許される。それが、私の生き方であり、生き延びる方法となりました。「他者から認められたい」と無意識のうちに強過ぎるほどココロの奥底で思っている自分は、こんな子ども時代の生き方をいまだに身にまわっているのかもしれない。早く脱ぎたいものです。

介護・親子・ウラの気持ち

私は結婚していますが、子どもはいません。それをコンプレックスに思うことはしょっちゅうですが、でも、「親」の立場になっていないことで、ひるむことなく「子ども側」の気持ちを想像することができて、これはひとつの援助職としての強みかも、とも思います。(自分を制御できずに代理戦争させてしまった失敗もありますが...)

親を介護する大人になった「子ども」さん方の、多様な気持ちに触れるたびに、親子であるがゆえの、めんどくささ、悲しさ、切なさ、などに共感し、言葉にならない部分を想像しています。